

緑地探訪

うみほし公園の緑化法面

(京都府宮津市里波見)

中村 剛

日本植生株式会社 (info@nihon-shokusei.co.jp)



2006年に都市公園として開設された、京都府立丹後海と星の見える丘公園（愛称：うみほし公園）は、本年の9月、地域生物多様性増進法に基づく自然共生サイトに認定された。自然豊かな里地里山を残すこの一帯は、環境省による「生物多様性保全上重要な里地里山」のひとつにも選定されている。NPO法人地球デザインスクールの運営するこの公園は地域における自然保護活動や環境教育の場としての重要な役割を果たし続けている¹⁾。

本稿では、2001年にこの公園の敷地造成工事において実施した表土利用工（森林表土に含まれる埋土種子を活用して現地の植生を復元する方法）による法面緑化を紹介したい。

生物多様性保全の一環として、1990年代後半より現地植物を用いた多様な緑化手法が模索されていた。当時は、植生基材に表土を配合して吹き付ける方法（森林表土利用吹付工）が各地で試行され、その成果が活発に学会報告されていた。しかしながら、報告された法面の多くは、場所の特定やアクセスが困難となり、施工地そのものが失われる事例も多く、今では確認することができない。筆者の調べた限りでは、うみほし公園内の法面は、今なお確認することのできる、最も古い森林表土利用吹付工の施工地のようなものである。

当時の我々にとって、森林表土を利用した切土法面に成立する植生は、全く予想できないものであった。そのため、施工地の一角に調査法面を設定し、ここに何人もの社員が足しげく通り植生調査を繰り返した。従来の法面緑化における調査方法（植被率と導入種の成立密度）だけでは、表土利用工の植生遷移をうまく捉え難いことがわかり、色々な調査方法を試みた。おかげで数多くのデータを得ることができた。

これら調査の結果は、3報の技術報告と1本の論文²⁾として、日本緑化工学会に発表した。今ならば経験的に理解でき

る現象であるが、施工当年には1年生草本群落が発立し、その後多年生草本群落、先駆性樹種による低木林を経て、10年程度で周辺高木林の構成種が多くを占める樹林へと移行する過程が初めて確認された。公園事務所に一声かけて園路を徒歩5分、2020年に訪問した時には、クリ、リョウブ、ソヨゴ、ヌルデなどを交えた高さ5mを超えるコナラ林が形成されており、周辺にみられる多様な植物がその下層や林床に生育していた（未発表）。

開発当初の表土利用工は、緑化の速度が遅く成立する植生の予測が困難³⁾とされていた。それから四半世紀を経た今日では、植生遷移に関する様々な知見が得られ、それらをもとにいくらか予測が可能となったように思う。その一方で、詳細は個々の現場によって異なり、成立する植生やその後の植生遷移については、今なお興味がつきない。

表土利用工は、地域性種苗利用工、自然侵入促進工と並び、自然公園をはじめとする厳正な自然保護が求められる地域で用いられることが多い。今後は、当該公園のような自然共生サイト、あるいはOECMにおける実施にも積極的に取り組み、地域の生物多様性保全に貢献していきたい。

引用文献

- 1) 京都府立丹後海と星の見える丘公園. <http://www.eco-future-park.jp/> (参照: 2025年11月14日)。
- 2) 中村剛・谷口伸二・大貫真樹子・藤原宣夫 (2014) 京都府北部における森林表土を利用した植生基材吹付工の植生遷移と自然回復の評価, 日本緑化工学会誌, 40(1): 8-13.
- 3) 日本道路協会 (2009) 道路土工一切土工・斜面安定工指針, 521pp.



写真: (a) 2001年7月（施工直後）、(b) 2002年5月、(c) 2005年8月、(d) 2013年10月、(e) 2025年10月